



日 日 是 好 日 (ひびこれこうじつ)

津 和 秀 夫*

若い若いと思っているうちに、いつの間にか髪は半白で薄くなった。顔にはしわが目立つ。動作緩慢、物忘れが滅法早い。それもそのはず、今春は昭和16年に入学して以来42年間、住み慣れた阪大工学部を、63才の定年で退官する身になった。

振り返ってみると、20歳代は勉強の時代だった。師の教えを聞き、内外の文献から学んだ。30、40代は研究の時代。30才頃から歩み出した生涯の研究が40才代になって実を結んだ。50才代は社会活動の時期。研究は後継者に譲り、専ら学界や産業界の世話をした。そして最後の2年間は、研究と教育から離れて、工学部長として管理業務に専従することとなった。

私の第一の人生は阪大工学部オンリーであった。私にとって阪大は最大の恩人だ。ここで恩師、先輩、友人、後輩、教え子達の暖い心に囲まれて幸福だった。今はしみじみとこれらの御縁を思い、阪大を通じて交誼頂いた人々に感謝している。

定年後の第二の人生は工学を離れて、ゆっくり人生を見直したい、というのが私の願望だ。「忙がしい」という字は「心」が「亡」ぶと書く。その通りで、日常の業務に多忙な余り、心が亡んでいたのではあるまいか。これからは職業を持たずに、好きなことをしよう。絵も面ことう。文章も作ろう。信仰生活もしよう。後輩のお世話もしよう。

今までは家庭は下宿屋のようで、夜更けに帰って、朝は鉄砲玉のように飛び出す毎日であった。これからは家庭のことにも力を入れよう。家内とも語り合おう。押入れも片付けよう。庭の手入れもしよう。花も植えよう。それから好きなお酒も、外ではなるだけ飲まないようにし

て、家で飲もう。そして家内と二人で旅行しよう。人生は夫と妻とで生きるものだから。(図1)

私はこう思っている。人は誰でも、父親と母親とが楽しみ合った結果に生まれてきた。だから人生を楽しむことが「親に孝」という人倫の根本主義となる。人生を悲しむなど、もっての外だ。ニヒリストなど、哲学的言辞を弄してはいても、所詮は人生の根本義のわからない「たわけ者」に過ぎない。ましてや、挙句の果てに自殺する者に到っては、外道も外道と言いたい。

「人生すべからく楽しむべし」というのが私の信条だ。苦しみも悲しみも、楽しみを増すための薬味だ。薬味が入ってこそ、料理はおいしくなる。だから苦しみと悲しみは、薬味程度にして直ぐ忘れよう。そして始終ケロケロとして暮そう。心にわだかまりがなければ、健康にも良いし、長生きもする。

人生を楽しむ姿を端的に表現する言葉が「日日是好日」だ。悠久5000年、大陸の歴史は古い。天災、人災、貧困、戦乱、疫病、生死を乗り越えて、大陸に生きる民は「日日是好日(ルーラーズ-ハオラー)」という凄い哲学を生み出した。酒仙李白も、この哲学によって「醉生夢死」の生涯を送ったに違いない。「日日是好日」を私流に訳せばこうなる。「毎日毎日楽しむうてたまらん。」

私の当面の目標は神職の免許をとることにあつた。大神神社(俗称、三輪の明神さん)に1カ月おこもりすれば、免許を頂けると聞いていた。普通の人は3カ月要するが、旧帝大出は1カ月でよいとのことで、帝大の特典を喜こんでいた。ところが調べて見ると、それは10年程前のことで、今は神宮皇学館で1年間の研修が必

*津和秀夫(Hideo TSUWA), 大阪大学, 名誉教授, 工博, 精密加工

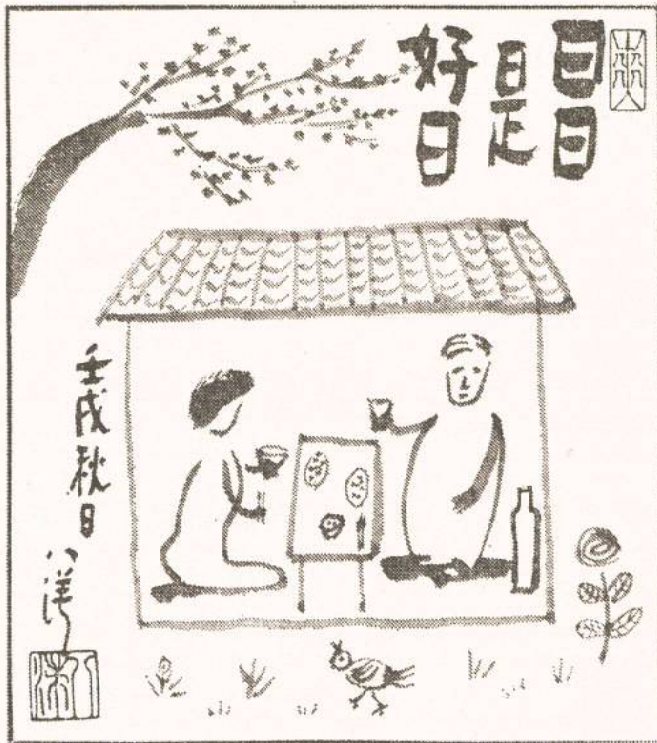


図1 第二の人生

要ということだ。

二月にお伊勢詣りをした後に、皇学館に立ち寄って願書をもらった。来年の春から1年間、伊勢に下宿して、独身生活を楽しもう。単身赴任だと、心楽しく家路についた。ところが家内に言うと、言下にはねつけられた。「わたし淋しい」というのが、表立った理由だが、裏には「何をするやら」という不安感があるらしい。「困ったことになった」と思っていたら、「国学院大学の1カ月の講習で免許がとれる」と教えて呉れる人があった。上京した折、国学院に寄り、パンフレットをもらった。今度は家内の許可も下りた。来年三月は講習に通い、桜の花の咲く頃は晴れて神職になる。神職には5階級があって、神宮皇学館の1年では最上位になれるが、国学院の1月では第三位となる。階級は何でもよい。ただ神職になればよいのだから、私が何故こうまでして神職になりたいか。私には私なりの考えがある。

私は第二の人生について、いろいろ考えた。文科系の教授は生涯その専門を続けることがで

きる。そして続ければ続けるほど奥が深くなる。ところが理科系、とくに工学の分野では、技術は日進月歩だから、老人の頭脳ではとてもついて行けない。いつかは工学をあきらめる日が必ず来る。

私の第一の人生は研究と教育によって社会に奉仕して来た。その奉仕の精神を第二の人生にも貫ぬくとすれば、それは宗教以外にあり得ない。宗教界で修行すればする程、魂が昇華する。生涯を賭けるに房わしい道がここにある。そして挙句の果てに目出たくあの世行きとなる。こうして私の第二の人生は宗教界での修行と決めた。これが大学教授の延長線として最も適当なものと思う。

私は神道の流儀でこの十数年間、毎朝水をかぶって来た。7年前からは庭に禊場を造って、厳冬でも禊祓の祝詞を唱えた禊をして来た。だから神職になる心の準備は十分にできているつもりだ。それに神道の本も読んでいる。神道による修行の手ほどきも受けている。

私は生産工学を専攻して来た。機械工場には友人が多い。教え子もまた工場で活躍している。これらの工場の地鎮祭や大きな機械の入ったときのお祓をしたい。生産工学の専門家が、恩師が、神職となって祝詞をあげる。これが本当のお祓いではあるまいか。あとは必ずおみきが出る。また楽しいことだ。可愛らしい女子大生の巫子さんとはコンビニでお祓をする約束ができている。

地鎮祭と言えば、7年前にガレージを建てる時家内を相手に立派にお祓をやった実績がある。結婚式もできるが、ホテルにそれぞれの神社が付いているので、これは難かしかろう。その他、開運、厄除け、鎮魂、病氣平癒、入学祈願、商売繁昌、夫婦和合、子授けから雨乞いまで、お祓いというお祓は何でもやる。私の第二の人生は全く「夢はバラ色」だ。

それが来年三月、国学院大学から神職正位の免許を頂くことによって実現する。乞御期待。